

# 家庭菜園

bigner's

2013年5月号



JA 滋賀蒲生町

## キュウリ を上手に育てる POINT

最盛期にはつる先が1日に5～6cmも伸びるほどに、キュウリは野菜の中では育ちが早いです。この早さを支えるように、手厚く管理することが、ことのほか大切です。

上手に育て上げ、良果をたくさん得るポイントは次の5つです。

(1) 早い育ちに応えられるよう元肥、追肥を上手に適期に施す。

施肥については、元肥は、少なくとも植え付けの1カ月前までに、畝全面に堆肥、ピートモス、有機配合、化成肥料をばらまき、18～20cmの深さによく耕し込んでおきます。根系は浅く横に広がるので、トマトのように深溝、縦型に施す必要はありません。生育、吸収が早いので、最初から肥効が十分表れることが必要。また追肥も半月に1回程度、油かすや化成肥料を与え肥切れさせないことが大切です。

(2) 葉が大きくて密になり込み合いやすいので、誘引・整枝・摘心を適切に、入念に行う。

誘引・整枝は、毎日見回って図のように芽かき、摘心し、支柱への縛りを入念に行いましょう。葉が込み過ぎた場合は、重なり葉や老化葉、病葉などの摘除も必要です。

(3) 土の乾燥や荒風に弱いので、マルチ、灌水(かんすい)を心掛け、風をよける対策を講じる。

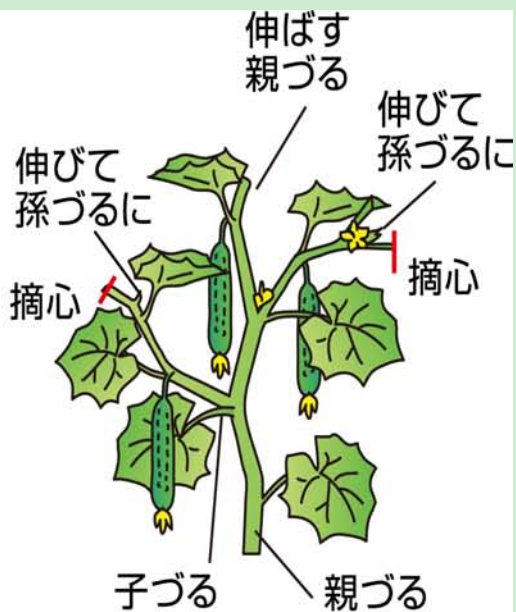
根はもろくて乾燥に弱く、一方、葉は大きく蒸散が盛んなので、それに応じる水分補給と、地面蒸発防止のマルチ、敷きわらを行います。葉は強風に当たると損傷しやすく、果実の風ずれを生じやすいので、防風ネットや障壁のソルゴ植えなどが必要な所もあります。

(4) 病害虫にやられやすいので、発生を早く発見し、先手を打って防除に努める。

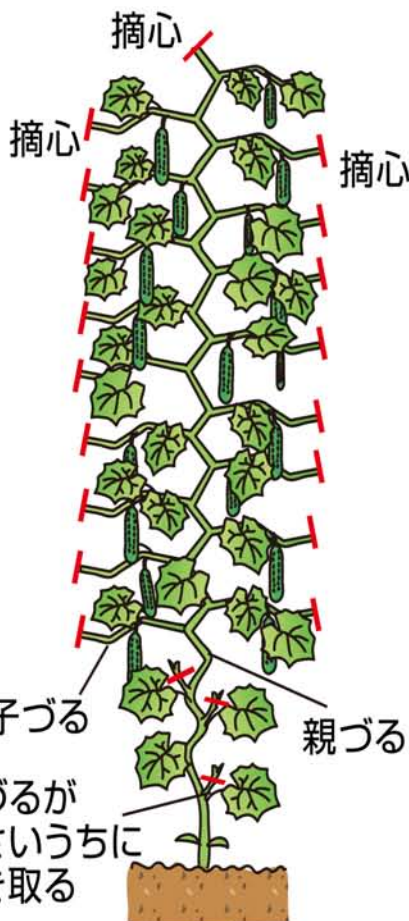
べと病、炭疽(たんそ)病、アブラムシ、テントウムシダマシなどに要注意。これらは特定の株から発生しやすいので、発生葉の摘除、害虫除去でまず対応し、薬剤の早期散布を心掛けましょう。

(5) 草勢、着果に応じて収穫果の大きさを変え、利用の仕方を工夫して食卓にぎわす。

収穫の大きさ100g内外は市場流通でのこと。家庭菜園ではそれにこだわらず、大果(150～180g、味はこれが一番)、もろきゅう(30～40g、みそを付けて丸かじり)、花まる(雌花の開花中のもの、つま物にして食べる)、添え物(雄花の開花中のもの、料理の飾り物)など、自由度の高い収穫サイズを楽しみましょう。



子づるは本葉2枚を残し、その先で摘心する。孫づるも同様に



雌花の付き方  
親づる……所々に  
子づる……第1節に  
孫づる……第1節に

※品種によって異なるものもある